

## [総合的な学習の時間]

# 探究的な学習を充実させる「意図的・計画的な体験活動の位置付け」に関する考察

－ストーリーのある出発点・通過点・到達点の意識化－

山崎 尚子\*

### 1 主題設定の理由

平成29年告示の小学校学習指導要領解説「総合的な学習の時間編」(以下、学習指導要領<sup>1)</sup>)では、総合的な学習の時間の目標(学習指導要領 p.8)に「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱から育成を目指す資質・能力が明示された。「思考力、判断力、表現力等」に対応する資質・能力は、「実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする」とあり、これは、「探究的な学習の過程において発揮される力を示している」と示される。(学習指導要領 p.14)また、「知識及び技能」に対応する資質・能力は、「探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする」と示される。さらに、目標の趣旨(学習指導要領 p.9)に「探究的な学習の過程を総合的な学習の時間の本質と捉え、中心に据える」とあることから、総合的な学習の時間における探究的な学習の重要性と探究的な学習の過程を通して行われる資質・能力の育成が求められていることが分かる。では、探究的な学習の過程を通して、資質・能力を育成するには、どのような手立てが考えられるのであろうか。まず、先述した「思考力、判断力、表現力等」に対応する資質・能力の冒頭に「実社会や実生活の中から問いを見だし」とあることから、学習内容は、学習者にとって実社会や実生活に根付いたものであることが適切だと考えられる。次に、「知識及び技能」に対応する資質・能力に関して、「その知識は、教科書や資料集に整然と整理されているものを取り込んで獲得するものではなく、探究の過程を通して、自分自身で取捨・選択し、整理し、既にもっている知識や体験と結び付けながら、構造化し、身に付けていくものである」(学習指導要領 p.13)と示されることから、総合的な学習の時間に育成する知識とは、単に情報として与えられたものではなく、探究的な学習の過程を通して、学習者が経験や体験をもとに獲得していくものを表していると考えられる。これらにより、学習者にとって実社会や実生活に根付いた学習内容のもと、これまでの経験や体験が探究的な学習の過程で活用されたとき、探究的な学習が充実し、目指すべく資質・能力がより効果的に育成されるのではないかと筆者は考える。

実践校がある地域は、新潟県内でも特別豪雪地帯に指定される雪深い地域である。この地で暮らす人々にとって冬の積雪は当然であり、除雪をして暮らしを営んでいる。それは、児童にとっても同様で、冬のお手伝いの一つは除雪である。令和3年1月、新潟県上越・中越地方は記録的な豪雪となった。この時、実践校の校庭には2 m70cmの雪が積もり、除雪作業が追い付かず、1月12日、13日は、臨時休校措置をとった。積雪による休校経験は、雪との暮らしに慣れ親しんだ児童にとって、衝撃的な経験となった。

本研究では、児童の生活経験を基盤に、「豪雪地帯の暮らし」に着目した総合的な学習の時間を実践する。そして、児童の生活経験や総合的な学習の時間に実施する体験活動をどのように位置付けると、探究的な学習の過程において、目指すべく資質・能力がより効果的に育成されるのか実践を通して明らかにすることを目的とする。

### 2 先行研究の整理

探究的な学習を実現するために、田村(2017)は、「到達点の明確化」と「通過点の具体化」を示している。また、金(2017)は、探究的な学習を充実させるには、「意図的・計画的な体験活動の位置付け」が重要であると述べている。では、体験活動を「意図的・計画的に位置付ける」にはどうしたらよいのであろうか。小藺、桑原(2017)は、「質的变化に着目した体験活動の位置付け」を示している。先行研究の概要と本研究との関連を次に記す。

\*柏崎市立高柳小学校

### (1) 「探究すること」を実現する「到達点の明確化」と「通過点の具体化」

田村(2017)は、総合的な学習の時間における探究的な学習を重視し、「探究すること」を実現するためのポイントとして、「到達点の明確化」と「通過点の具体化」の二点を提示している。これについて、田村(2017)は、「探究にはプロセスがあり、そのプロセスが繰り返されていく。重要なことは、そのプロセスが目指す方向性、ベクトルを明らかにしていくことにある」また、「何を学び、どのような概念を形成する認識の高まりが期待できるのか。その到達点を明らかにしておく必要がある」さらに、「そのために通過点では何を行うべきかも明らかにしておく必要がある<sup>2)</sup>と述べている。これを受けて、本実践では、「到達点」に設定した総合的な学習の時間の目標に向かって、「通過点」に体験活動を位置付けていく。このとき、1年間の学習を貫くテーマ「わたしたちの(地域名)と暮らし」との関わりを考慮して体験活動を設定し、学習の方向性やベクトルが明らかになるよう意識した。(図1)

### (2) 意図的・計画的な体験活動の位置付け

総合的な学習の時間を展開するにあたり、体験活動の実施は、学習の深まりが期待できるとして重視されているが、学習指導要領では、体験活動の位置付けについて「探究的な学習の過程に適切に位置付ける」(学習指導要領 p.55)とある。これについて、金(2017)は、「体験活動や学習活動が、設定した探究課題に迫り、それを解決するために行うものであるように位置付けること」また、「意図的・計画的な体験活動の位置付けで、探究的な学習の過程は一層充実していく<sup>3)</sup>と述べている。これを受けて、本実践では、年間指導計画を考える際に体験活動を実施する時期やその内容を意図的に計画した。

### (3) 体験の質的变化に着目した体験活動の位置付け

小藪・桑原(2017)は、体験の質的变化に着目し、対象に対する子どものアプローチの仕方から、体験活動を「〇〇と遊ぶ体験」、「〇〇を学ぶ体験」、「〇〇とともに生きる体験」の3つの体験に類型化した。さらに、「〇〇と遊ぶ体験」→「〇〇を学ぶ体験」→「〇〇とともに生きる体験」の順に連なった単元の構成により、①問題を自分事として捉え、学習活動への主体性といった情意面が高まる②体験を通して培ってきた思考力・判断力・表現力が総体として発揮される③子ども自身が学びのステップアップを自覚的に捉えられる、の三つの価値があると提示している。これを受けて、本研究における「意図的・計画的な体験活動の位置付け」においても、「〇〇と遊ぶ体験」→「〇〇を学ぶ体験」→「〇〇とともに生きる体験」の順に体験活動を位置付けることにした。

## 3 研究の目的と研究仮説

先行研究を踏まえて、本研究では、次のような目的と研究仮説を立てる。

### (1) 研究の目的

学習者の生活経験や総合的な学習の時間に実施する体験活動をどのように位置付けると、探究的な学習の過程において、目指すべく資質・能力がより効果的に育成されるのか実践を通して明らかにする。

### (2) 研究仮説

総合的な学習の時間において、学習者の生活経験を「出発点」に、体験活動を意図的・計画的に「通過点」に位置付けると、探究的な学習が充実し、「到達点」に向かって目指すべく資質・能力がより効果的に育成されるのではないか。

田村(2017)は、探究における「到達点」と「通過点」の重視を述べているが、その「出発点」については触れていない。しかし、田村(2017)が述べる「探究プロセスの方向性やベクトル」の先頭で、学習の始まりは、いかに設定すべきか、筆者は疑問に思う。そこで、本研究では、田村(2017)の提示に加えて、学習者の生活経験をもとにした「出発点」を意識的に位置付けた実践を行う。そして、学習者の生活経験をもとにした「出発点」や「通過点」に位置付けた意図的・計画的な体験活動が、探究的な学習を充実させ、資質・能力の育成につながったかどうかを考察し、この手立ての有効性を探っていく。このとき、体験活動を含む探究的な学習の過程を通して、学習者が新たな知識や技能を獲得したり、そこで得た知識や技能を活用して思考、判断、表現したりする姿が見られたとき、探究的な学習が充実したと筆者は考える。なお、「通過点」においては、小藪・桑原(2017)が提示する体験活動の位置付けを本研究仮説を立証する拠り所とするため、本実践においても「〇〇と遊ぶ体験」→「〇〇を学ぶ体験」→「〇〇とともに生きる体験」の順に体験活動を位置付けることにする。

## 4 研究の内容と方法

### (1) 研究の内容

**出発点** 令和3年1月の積雪による休校経験

- 通過点**
- ①「地域資源と遊ぶ体験」 里山でのメダカ捕り，自然体験教室
  - ②「地域の暮らしを学ぶ体験」 移住者との出会い，雪との暮らし調査
  - ③「地域とともに生きる体験」 学習のまとめ，アニメーションへの表現活動，学習発表会

**到達点** 探究的な見方・考え方を働かせ，横断的・総合的な学習を行うことを通して，よりよく課題を解決し，自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成する。（総合的な学習の時間の目標より）

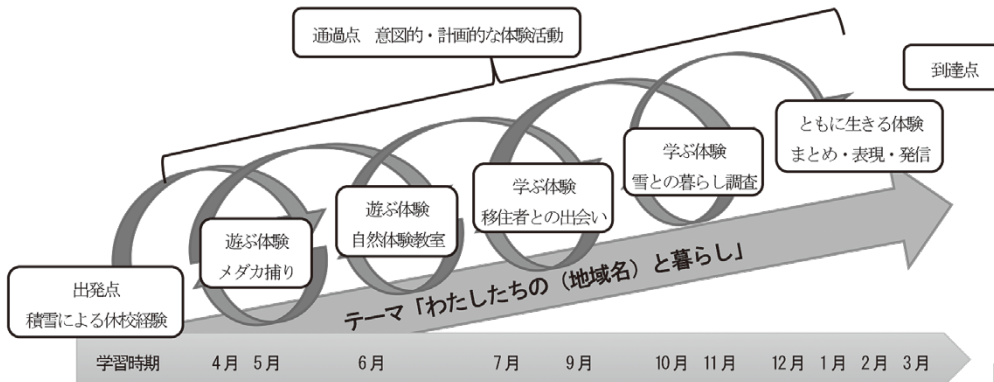


図1 「1年間の学習展開」

### (2) 研究の方法

教育活動から得られた抽出児2名のワークシートへの記述を分析する。なお，児童の記述内容の分析は，より客観的な考察となるよう，複数名で対応した。

## 5 実践の概要と考察

令和3年度，公立学校5，6年生(複式学級4名)に対して実践した「わたしたちの(地域名)と暮らし」の概要と考察を述べる。1年間を通して児童が学ぶ姿が分かるように，活動の実際を時系列に沿って記す。

### (0) これまでの生活経験の想起と共有

1年間の学習の始まりにあたり，地域の暮らしについて想起した。前学年までの学習や実生活での経験を通して実感した地域の魅力を語る児童が多かった。ある児童から，「冬はスキーができる」という発言が出たとき，「1月の雪には，驚いたね」，「雪で学校が休みになるんだね」と1月の豪雪経験を想起し，他の児童も共感する姿が見られたが，ここでは，「冬に雪が降るのは当たり前」という児童の捉え方を受け止めることにとどめた。

#### 児童のワークシートへの記述

- ・自然の空気がおいしい ・地域でとれる野菜や山菜を使って，いつも自家製のを食べられる
- ・山菜のおいしさを知っている ・山の水を使ってお米を育てている ・地域の人と一緒に楽しむイベントが多い
- ・冬はスキーができる

### (1) メダカ捕りとメダカの生息環境調査【地域資源と遊ぶ体験】

地域の里山には，野生のメダカが生息している。児童が地域の自然環境に着目することを意図し，メダカ捕りを行った。30匹ほどのメダカを学校に持ち帰り，飼育活動を始めたのだが，観察を始めると水槽の中には2種類の魚がいるように思われた。ここで生まれた疑問「この魚は，本当にメダカなのか？」を解決するべく，調べ学習を行った。調べると，水槽の中の魚は，メダカとモツゴであることが分かった。さらに，野生のメダカは絶滅危惧Ⅱ類に指定されていることやその生息環境は，水環境が良く，農村環境の開発がされていなくて，外来魚の影響を受けない環境であることが分かった。

#### 児童のワークシートへの記述

- ・メダカは絶滅危惧Ⅱ類であることが分かり，調べてみて，よりいっそうメダカに興味をもちました。
- ・あの魚たちは，本当にメダカなのか？と思いました。メダカが生息していることが明らかになって，びっくりしました。〇〇さん(里山の持ち主)のところは，すごいなと思いました。



この体験から、地域の里山は、絶滅危惧類に指定される生物が生息できる環境であることが分かり、地域資源に対する児童の関心が高まる様子が見られた。

#### (2) 自然体験教室【地域資源と遊ぶ体験】

地域には、宿泊施設がある。施設の組合長からご協力いただき、農村の暮らしを体験する宿泊活動を実施した。二日間の日程で、「暮らし」をテーマに様々な活動を行った。入浴をするために地域で湧いている天然の鉱泉を汲みに行き、自分たちで薪割りをして五右衛門風呂を沸かししたり、食事のために千歯こきや臼を使って稲を玄米にしてかまどでご飯を炊いたり、他にも食材となる山菜を摘んで調理をしたり、ブナ林で遊んだりした。

##### 児童のワークシートへの記述

- ・温泉の入ったタンクを持ち上げようとする、重たくて一人では持つことができませんでした。でも、地域の方が支えてくれたので力のいる活動にも取り組みました。薪を割るときは、印にそって割りました。薪がないと五右衛門風呂に入れないので、一生懸命に取り組みました。ブナ林では、ターザンロープやブランコ、ハンモックに乗って自然の風を味わうことができて幸せでした。
- ・水(鉱泉)を汲んだとき、すごく冷たかったし重かった。でも、山の水を飲んだとき、冷たくて、体が冷えておいしかった。鉱泉汲みでは、汲んだ水を運んで入れるのが大変だった。薪割りは、割るのが楽しかった。米は、手作業でやると大変だった。力が必要で大変だった。(活動後に食べた)もちがおいしかった。

この体験から、多少の困難さを感じながらも地域の自然環境を存分に味わい、児童は暮らしを営む活動を楽しむ姿が見られた。

#### (3) 移住者との出会い【地域の暮らしを学ぶ体験】

地域には、他地域から移住して暮らしている方がいる。その方々は、地域との関わりをもちながら自営業で生計を立て、暮らしを営むスタイルが特徴的である。3人の移住者と出会う場を設定し、どのような暮らしを営んでいるのかインタビューを行った。3人の移住者は、山菜と雑貨の店を営む方(下記では、□□さん)、デザイナーで自分のギャラリーを開いて洋服を販売している方(下記では、○○さん)、地域おこし協力隊の方(下記では、△△さん)に協力を依頼した。

##### 児童のワークシートへの記述

- ・お客さんがずっと服を着てくれるように、半年かけて作品を作る○○さんは、素敵だと思った。地域の土地に合わせて作った物を見ると、作った人の思いが伝わってきた。地域を好きになってくれて、いいところを発見してくれる△△さんは、地域にかかせない人だと思う。
- ・□□さんは、野菜の栽培だけでなく、動物7匹と魚を飼っていてすごい。私は、動物や自然に優しく、自然の中で暮らしている□□さんが好き。△△さんは、いろんなことをしていて、すごいと思った。楽しそう。私もやってみたいと思った。地域の人たちのために、鉄砲を持つ資格を取ったりしていて、すごいと思った。

この体験から、3人の移住者が地域に魅力を感じて移住し、地域の人との関わりを楽しみながら暮らしている様子を児童は知ることができた。

#### (4) 雪との暮らし調査【地域の暮らしを学ぶ体験】

これまでの体験活動を通して、児童は、地域の暮らしに対する肯定的な面を知り、実感してきた。また、地域の大人が暮らしを楽しんでいる様子を知り、喜びを感じている姿も見られた。児童が感じた地域の魅力を十分に共感したうえで、1月の積雪による休校経験を想起し、冬の暮らしについて考え始めた。

まず、雪との暮らしについて、自分の考えを整理し、保護者の考えを収集した。

##### 児童のワークシートへの記述

- ・私にとって、雪は、楽しい時や苦勞する時もある。みんなでそりやスキー、かまくら作りをするときは楽しい。雪掘りやホワイトスノー、道ががたがたになると苦しい。消雪パイプの水で、服がびしょびしょになる。外を歩くと寒い。お母さんにとって、雪は、景色がきれい。
- ・私にとって、雪は、スキーもできるし、雪遊びができて、雪は楽しい。けれど、車庫から車を出すときや雪掘りに時間がかかることが大変。外を歩く時は寒し、消雪パイプで服がびしょびしょになったこともあった。お母さんにとって雪は、家から出るのに除雪で30分、車を車庫から出すのに30分、帰ったら、また30分ずつかかる。いつも時間に追われている。自分は雪が楽しいけれど、お母さんにとっては、雪は大変でいつも時間がない。

自分の考えと保護者の考えを知り、どちらにも雪に対する肯定的な意見と否定的な意見があることに気付いた。そこで、収集した情報を肯定的な意見と否定的な意見に分類し、整理した。すると、児童と保護者の意見では、雪に対する否定的な意見の方がやや多いことが分かった。さらに、地域の雪の暮らしのプロフェッショナルに話を聞き、同じように意見を分類、整理した。すると、雪に対する肯定的な意見が上回ったが、これでは一般の地域住民の意見とは言えない。(写真1)この時、「地域の人は、雪との暮らしをどう思っているのだろう」という疑問が児童に生まれた。そこで、学校支援ボランティアの地域住民(20名)にアンケート調査を行った。アンケートの内容は、雪について「好き」、「どちらかというが好き」、「どちらかというときらい」、「きらい」の4択から選択式で回答してもらい、その理由を記述式で回答してもらった。結果は、写真2・3のように整理した。



写真1 「雪との暮らしgoodとbad」

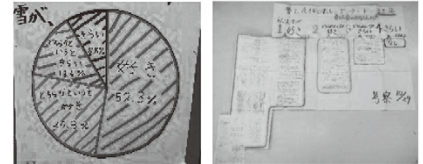


写真2・3 「雪との暮らしアンケート」

児童のワークシートへの記述(アンケート結果分析後の児童の考察)

- ・私は、地域で生活すると除雪するのが大変で、「雪が嫌い」が多いと思っていたけれど、結果は「雪が好き」が多くて、アンケートをしてよかったと思いました。大人の人でも雪が好きで、冬のイベントなどを楽しんでいるところがいいと思いました。私は、「雪との暮らし」のアンケート結果を見て、地域の人にとって、雪は必要なものだと思います。どうしてかという、春になったら山菜を採ったり、田植えや畑、農業をしたりするために、雪が降らないと水が少なくなって、できなくなってしまうからです。例えば、地域の人は、「雪が少ない年は、山菜もいい物が採れない」と言っています。このように、私は、雪は地域の人にとって必要だと思いました。
- ・アンケート結果を見て、地域の人にとって、雪は、生活の中で「きらい」と言いながらも、暮らしを支えているかけがえのない存在だと思いました。そして、私は、雪と一緒にこの地域で暮らしているんだと思いました。雪が降った次の年は、おいしいお米ができたり、山菜が採れたりするので、雪は必要だと思いました。例えば、地域の〇〇さんは、「人間にとっても生き物にとっても、雪はおそろしく、にくたらしいものですが、雪のおかげで人と人が協力し、感謝する心が成長して豊かになる」と言っています。このように、私は地域の人にとって雪は、暮らしを支えてくれるかけがえのない存在だと思います。

下線部「地域の人にとって、雪は必要なものだと思います。どうしてかという、春になったら山菜を採ったり、田植えや畑、農業をしたりするために、雪が降らないと水が少なくなって、できなくなってしまうからです」や「雪と一緒にこの地域で暮らしているんだと思いました。雪が降った次の年は、おいしいお米ができたり、山菜が採れたりするので、雪は必要だと思いました。例えば、地域の〇〇さんは、『人間にとっても生き物にとっても、雪はおそろしく、にくたらしいものですが、雪のおかげで人と人が協力し、感謝する心が成長して豊かになる』と言っています。このように、私は地域の人にとって雪は、暮らしを支えてくれるかけがえのない存在だと思います」という記述から、それまでには見られなかった「雪との暮らし」に関する新たな知識を児童が得ていることが分かる。また、このことは、アンケート調査によって得られた知識を活用し、思考した姿が表出したと捉えることができる。

#### (5) 学習のまとめと表現、発信【地域とともに生きる体験】

1年間の学習を振り返り、テーマである「わたしたちの(地域名)と暮らし」について、自分の考えをまとめた。

児童のワークシートへの記述

- ・自然は、次の季節の暮らしに必要なことを私たちに合図してくれている。例えば、強い風が吹くと雪が降るし、空気がよいと植物がよく育ち、水は天然でおいしい。これからも、暮らすために自然を守ることが大切だ。
- ・私は、自然があるから暮らしがあるのだと思います。山があるから山菜が採れます。雪があるから水ができ、水があるからみんな(植物、動物、人)が育ちます。暮らしが自然に合わせるのが大切だと思います。この地域の人は、その暮らしができています。だから、野生のメダカもいます。私は、スキー、山菜、地域のイベント、森の中が好きです。

下線部「これからも、暮らすために自然を守ることが大切だ」や「暮らしが自然に合わせるのが大切だと思います」という記述から、児童が「暮らし」と「自然」を結び付けて思考したことが分かる。また、「暮らしが自然に合わせるのが大切だと思います。この地域の人は、その暮らしができています。だから、野生のメダカもいます」という記述は、体験活動「メダカ捕り」で得た知識を活用し、思考した姿が表出したと捉えることができる。

最後に、まとめの活動として、1年間の学習をアニメーションに表現した。(写真4)そして、学習の成果を学習発表会や地域の観光施設で発表し、地域のよさを発信した。また、「地域のよさを近隣校の友達や同じ市の人々にも知ってもらいたい」という願いが児童に生まれたため、作成したアニメーションを学校のホームページに掲載し、紹介した。すると、地域住民や近隣校の児童、報道局の方からも感想をいただくことができ、児童にとって大きな喜びと学習への満足感を感じられる活動となった。



写真4 「アニメーションの表題」

## 6 成果と課題

### (1) 「通過点」に設定した意図的・計画的な体験活動の位置付け

本論文の5(4)「雪との暮らし調査」に記載した児童のワークシートへの記述(下線部)や5(5)「学習のまとめと表現、発信」に記載した児童のワークシートへの記述(下線部)には、「雪との暮らし」に関して、アンケート結果分析後に新たに得られた知識が記述された。また、アンケート調査によって得られた知識を活用し、思考、判断、表現した姿が表出していると捉えることができる。さらに、学習のまとめの段階で、体験活動「メダカ捕り」で得た知識を活用し、思考した姿が記述に表出されたことは明らかである。このことから、体験活動を含む探究的な学習の過程を通して、児童が新たな知識を獲得したり、そこで得た知識を活用して思考、判断、表現したりする姿が見られたため、本実践における探究的な学習が充実したと言える。よって、「通過点」における意図的・計画的な体験活動の位置付けが、探究的な学習過程を通して、資質・能力を育成する可能性を高めたと考えることができる。このとき、体験活動の位置付けにおいては、本研究仮説を立証する拠り所とした小藪、桑原(2017)が提示する体験活動の位置付けが本実践のテーマにおいても有効的であると言えそうだ。

### (2) 学習者の生活経験を基盤にした「出発点」の意識化

田村(2017)が報告する「到達点の明確化」と「通過点の具体化」に加え、「出発点の意識化」が探究的な学習を充実させる可能性があるのではないかと考える。本実践では、児童が実社会や実生活を通して経験した令和3年1月の積雪による休校経験を「出発点」に位置付け、授業者は「出発点」を意識した学習活動を展開していった。実践の実際では、「通過点」において、体験活動を通して地域の暮らしに対する肯定的感情を積み重ねた児童が、「本当にそうであろうか」と再び実社会に関心を寄せたのが「雪との暮らし調査」であった。このとき、児童は「雪との暮らし」に関するこれまでの自分の生活経験を想起し、自分の考えや保護者の考えを整理・分析することを通して、「地域の人々の考えも知りたい」と意欲を高めていた。そして、その意欲が学習を発展させた。これにより、学習者の生活経験を基盤にした「出発点」を意識した学習展開は、探究的な学習を充実させる可能性があるのではないかと考える。しかし、これについては、本実践における比較対象が無いため、その有効性について数値によるデータで検証しきれない。そのため、今後も実践を通してよりよい手立てを探っていくことにする。

最後に、本研究を通して、探究的な学習を充実させる可能性を高めた「学習者の生活経験を基盤にした出発点」を意識した実践を行うためには、児童理解が大切になると考える。これについて、本実践においては、2年間持ち上がりで担任した児童が対象であったから実践できたと言うこともできるだろう。それでは、初めて出会った学級で、総合的な学習の時間の「出発点」にあたり児童の生活経験に着目した児童理解を深めるためには、どのような方法があるのだろうか。このことを探っていくことを今後の課題としたい。

## 引用・参考文献

- 1) 文部科学省(2018)『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総合的な学習の時間編』東洋館, pp.8~17
  - 2) 田村 学(2017)「探究モードへの転換と環境に関する教育-総合的な学習の時間を通して-」, 日本環境教育学会 pp.17, 18
  - 3) 金 洋輔(一部執筆), 田村 学(2017)『新学習指導要領の展開 総合的な学習』明治図書, pp.66, 67
- ・小藪 博臣, 桑原 広治(2017)「体験の質的变化による, 総合的な学習における体験プログラムの作成」『日本生活体験学習学会誌 第17号』九州大学
- ・参考資料 作成したアニメーション「とびだせ!(地域名)~わたしたちの(地域名)と暮らし~」, 実践校所有